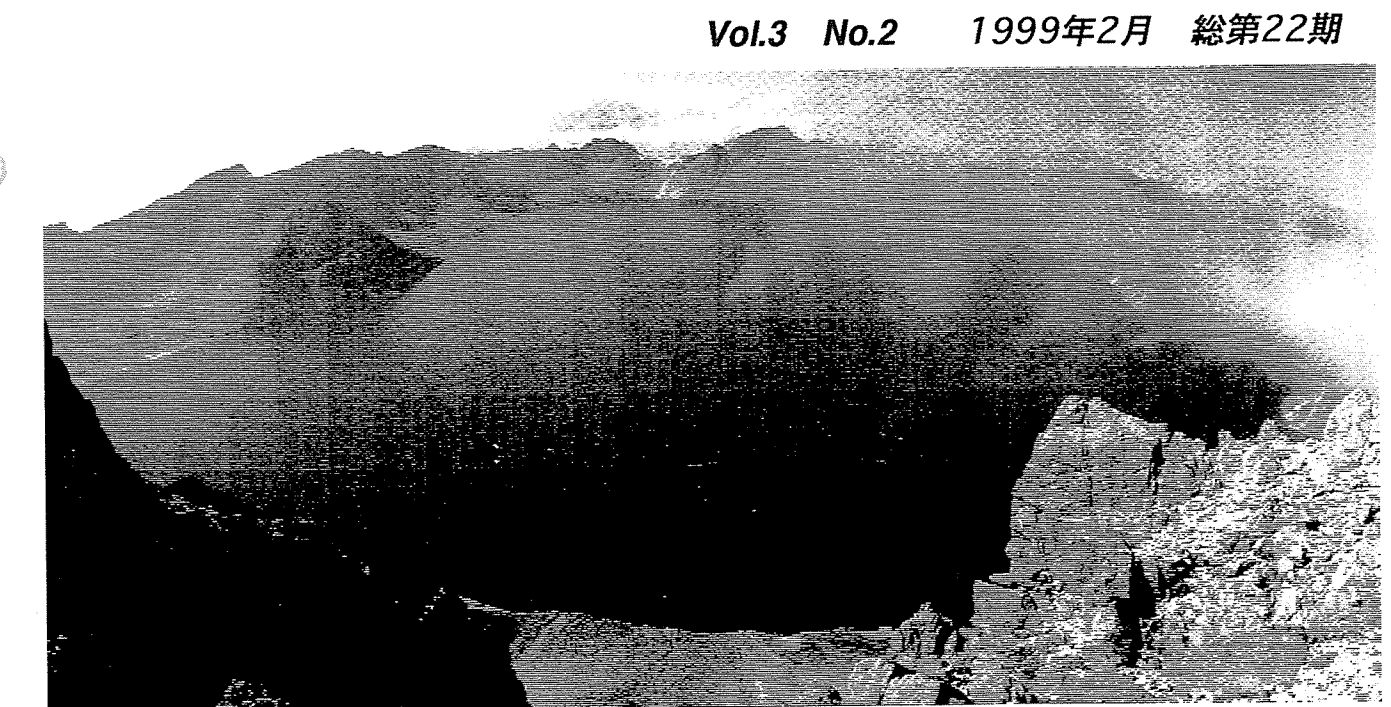


천지인문

天池人文

~我々が考え、我々が実行し、我々が支援し、我々の夢を実現する~

CHONJI CULTURE



天池倶楽部 発行

CONTENTS／目录／목차／目次

巻頭エッセイ	1
限界にチャレンジして	2
未完の裁判	7
「わたしと朝鮮語の出会い」	12
녀류시인 황진이의 금강산유람	14
中国職業足球觀戦記	17
자연스레 살어리랏다	19
知って得するカード知識	20
コンピュータ「計算機」基礎講座	22
歴史小知識	23
本の主人公になりませんか	24
새책소개	26
天池俱樂部第48次定例会通知	27
東西南北（文摘）	28

巻頭エッセイ

在来味噌のパワー

黄 正浩

在来味噌とは伝統的な作法で醸造した言わば手作り味噌のことだが、まだ辞書には単語登録されていないようだ。

実は、在来味噌党である我が輩、数十年もの味噌くさい暮らしをしながら、これまで真剣にその味を吟味したことはついぞ一度もなかった。自然食品だから自然に思い流したかもしれない。手作りブームに生きている我が輩、自分なりに探しまくったのがツケばパワーがでる在来味噌である。

約一ヶ月前のこと。朝食後一服しようと思って横になると急に眩暈がし、そのまま卒倒、隣の友人の車で救急病院に運ばれた。在来遅脈からの酸欠では、と診察医師に病状を訴えたところ、皮肉な返事が返ってきた「心臓とは関係ありません。餓えからの疲れではないでしょうか」例の北朝鮮ではあるまいし、まさかとみんなが首を傾げる。よく考えて見ると確か二日間酒に溺れ、ろくな食事をしていない。「油断」で脳味噌が切れようとしたのだ。病院から帰宅し、冷蔵庫の奥にしまっていたおふくろの手作り味噌でチゲを作り、さっそくお腹を慰労する。するとついさきほどまでたらんと力が抜けていた手足が目の前でびよんと動き出すではないか。神妙な顔で見守っていた皆がどっと吹き出した。自分ながらも失笑した。味噌をつけて恥ずかしかった。なんと滑稽な光景であったろう。

翌日、会社のお昼休みに、日経新聞で日本のビル・ゲイツと言われている孫正義ソフトバンク社長に関する記事を読んだ。今年に入って新聞の経済面に頻繁に姿を現し、なにやら随分儲かっている印象。

さて、「問題」はその親切さに満ちた厭きない笑み、テレビで見ても、写真で見てもどことなく不思議なパワーが漲っている。正にバターくさいでもなく、カレー匂いでもなく、どうも味噌くさい顔だ。脳味噌が溢れているからか。一方、同じく味噌派であるだろう囲碁の最強名人趙治勲氏も新聞のスポーツ面をしばしば飾る。挑戦者に完勝、連勝という記事に映ったその笑顔も実に素敵だ。しかも、いかにも脳味噌たっぷりの人相だ。対戦者の甘味噌っぽい顔とはいつ見ても対照的だ。むろん調べようはないが、その年齢から推測して、在来味噌の味で育った幼年期が窺われるのは否めないだろう。

当たり前の話だが、中国にも味噌がある。回郷知青の時代、村の山東出身の人々が毎朝決まって葱に味噌を塗り、それをゼンピンで巻いて食べていたのが記憶に新しい。いまに思うとそれは本能に近い元気付けの日課だった。ならばあの有名な北京ダックもその延長線に過ぎないではないか。要は山東味噌は水っぽい、故に塗るしかない、ツケれんのだ。

日本人はどうだろう、テレビのコマーシャルは毎日味噌汁の、味噌ラーメンのとやたらにうるさい。スーパーにもカラフルな味噌商品が何十種類肩を並べているが、それほど人気がないようだ。いまはどうもカレーとか、ピザとかのほうに人気が集まりがちで、むしろ

（6 ページに続く）

限界にチャレンジして

李相哲（龍谷大学助教授・新聞学博士）

「人生において重要なことは成功することではなく努力することである。根本的なことは征服したかどうかにあるのではなくよく戦ったかどうかにある」——クーベルタン

「マイナス2千円」のスタート

私は1987年9月21日19時20分東京に着いた。今でもはっきりと覚えている。新幹線から降りた所の階段に近い電話ボックスの側でうろうろしていたのが、この時刻だった。どこへいくか、どこに泊まるかも決めずとにかく東京にきた。1千万を超える人口の住むこの町には一人の知り合いもいなかったし、お金もなかった。東京に着いた頃にはポケット300円位しか残っていなかった。東京では、パン一つと缶ジュースを買えるお金だ。

どうしてそんな無謀で、無計画の旅に出たのか、今になって考えるとゾットする。当初留学のために準備したお金は全部で人民元1500元、1ヶ月56元の月給取りには大金だったが、パスポートを作り、ビザを取るために北京を往復、上海に出て大阪行き船の切符を買ったら、残されたお金は人民元数十元と日本円1万円しかなかった。これが日本「留学」の全部の資金だった。それでも出発の時は、それまで溜まっていた日記帳や写真だけを鞆の中にいれ、二度と戻らないと腹をきめた。

船の中では、お金がなかったこともあり、また緊張して48時間飲まず食わずに過ごした。日本が近づくにつれ不安は募るばかりだった。将来の心配より、大阪に着いてどうするのか、千葉まで行くにはどう行けばいいのか、1万円で足りるだろうかという心配ばかりしていた。やはり、大阪から1万円では千葉までの切符は買えないというので、ハルビン工業大学から東京工業大学に留学するという林先生から2000円を借りて何とか東京に着いた。日本での生活は、「0」からではなく、2000円の「マイナス」からのスタートになった。

すべては偶然の出来事

私が日本にくることになったのは偶然のことだった。ハルビンで知り合った残留孤児の人が、日本に遊びに行かないかと誘ってくれたのが始まりである。

日本に留学したいという気持ちは大学時代からあって、大半の時間は自分の専攻とは全く関係のない日本語の勉強に費やしていた。その時まで「留学する」というだけでも新聞に大書特筆されるぐらい珍しいことであった。私はただ漠然といつかは日本にいくのだと

思った。外国に行くというだけで「留学」ができるのだと思った。後で知ったことだが、その時彼（残留孤児の人）が私に送ってくれた「招聘状」は「訪友」（滞在期間15日）であって、「留学」とは無縁のものだった。

彼（残留孤児の人）は、50年代に日本人だった母親に連れられて帰国した人であるが、85年あたりからハルビンにやってきてビジネスをはじめた。中国語がまったくだめで、通訳を探していたが、なんと条件は日本語を勉強させる代わりに無報酬で働いてくれる通訳をさがしていたのである。私はあれこれ半年くらい彼の仕事を手伝ったが、帰国後彼からは1年以上経っても消息もなく、彼のことはすっかり忘れていた。その時、彼から「招聘状」が送られてきたが、招聘者の名前は彼ではなく、聞いたことのない日本人の名前だった。

とにかく手続きは無事済ませ日本にやってきたが、しかし、東京に着くまでに彼に電話一本入れてなかった。今になって反省するが、昔の我々（私だけではないと思う）は、国際電話までして予定を組むという習慣も、そういう発想もなかった。とりあえず日本に行けばなんとかなる、死にやしないだろうと思いながら東京に着いたが、頼れる人は彼しかいなかった。但し、彼が今頃家にいるとは限らない、引っ越したかも知らない、出張中かもしれないことばかり考えた。東京駅について、彼に電話するつもりだったが、生まれてはじめて見る公衆電話をどう使えばいいか分からなくてうろうろしているとき背の高い酔っ払いおじいさんが私に向かってきた。この人が、私には「運命の人」だった。その後の私の日本における進路に多大な影響を及ぼす人である。彼はかなり酔っ払っていたが、電話のかけ方や千葉までの道順を親切に教えてくれた。また、何を考えていたのか弁当を買ってくれた（二日間なにも食ってないというのが顔に出ていたのか）。分かれるときに名刺を差し出しながら、赤ペンで「ここに電話せえ」といいながら電話番号に赤線を入れてくれた。その名刺には電話番号がいくつもあって、わけが分からないし、まあただの酔っ払いだろうと思ったのでその後この件は完全に忘れていた。

その夜、千葉駅で待つこと4時間、残留孤児の人は夜中1時になって駅に現れました。連れていかれたのは、一晚2000円する薄くらい旅館でしたが、そこで一晚寝ることにし荷物を降ろした。彼とは翌朝会うことにし分かれたが、疲れてはいるものの眠れない。テレビをつけるとどのチャンネルも「変な人」や女の子が出てきてげらげら笑ったり、騒いでいましたので全然面白くもないので、目を開けたまま天井を見つめているとなんだか不思議な気がした。どこかの違う惑星から地球に投げ出され、ぽつんと旅館の畳の上に落ちているような気分だった。「これが日本なのか、明日はどうなるんだろう…」といろいろ考えに深けて殆ど寝なかった。

死にやしない、何とかなる

それまでのすべての実績も、人間関係も、経験も、肩書きも全く関係なく「ゼロ」から

はじめなければならないのが「留学」であろう。役に立つのは、お金と判断能力（価値観）だけ。二つの中でより大事なものといえば判断能力だ。すべては、自分の判断によって決まる。助言をする人もなければ、行動をはじめた時にそれがよいか、悪いかを評価してくれる人も、基準もない。結果が出るまでそれがよい結果を生む決断だったのか、悪い結果につながるものであったか自分も知ることができない。環境のせいにしたたり、誰かのせいにすることもできるが、それによって結果が生まれるのであれば、そういうことをやっても多いにいいわけだ。

さて、翌日彼（残留孤児の人）と一緒に東京に出てきた。彼が連れていったのは、市ヶ谷の自衛隊会館の一階にあるレストランだった。そこで1時間500円の食器洗いの仕事をはじめることになった。そこではじめて分かったが、私は、そのレストラで働くことを条件に連れてこられたのであった。保証人はその店の社長だった。当時の日本は、バブルの絶頂期でどこも人手不足で悩んでいた。

とにかく初日から仕事が「みつかり」、その場で長靴と白い制服を支給された。白い服に着替え、白い帽子をかぶり、洗い場に入った。1週間前まで机に向かって座り、新聞を捲りながら、一日をつぶした自分がこんなにすばやく「豹変」してしまうことに妙な気分だった。その日はなにがなんだかさっぱりわからないまま仕事場につき、やらせるがままに一生懸命になって「はい！はい！」を連発しながらはしり回るうちによるになった。夕方になってふと思った、千葉まで帰るお金をもっていない。9月の下旬の東京は、寒くないものの外で寝ることもできまいし、歩いて帰ることも不可能、「まあ、死にやしないだろう、何とかかなる」と自分に言い聞かせながらも妙案は浮かんでこない。やはり店長に事情を説明するしかない、そこで10時ぐらいになっていきなり「お金を貸して下さい」と言ってしまった。

その詞に、店長はにっこりと笑い、何の返事もしなかった。私はわたしなりに、今日一日12時間以上働いたから1時間500円で換算しても、6000円はなるんじゃないかと思った。

それから、30分くらい経ったところで例の彼が店に現れた。社長が「派遣」した開発室長と名乗る伊藤という人と一緒に。彼らに呼ばれた。その場で開発室長というやつが厳しい口調でなにかをぺらぺらしゃべったり、怒鳴ったりした。大体の意味は、日本ではお金を借りないのが常識、しかも仕事場で初日というのにお金を借りるとはなんのつもりだということだっただろうと思う。恥ずかしいというか、惨めな自分に怒ってやりたい気分だったが、その時はとにかく生きるための本能のほうが強くて働いていたし、一生懸命だったので体面もなんにも関係なかった。店長が室長になにかをしゃべり、やがては室長が財布から2万円を出してくれた。

自分自身の限界にチャレンジする

仕事がみつかり、2万円を手にした私は、やっと日本にいるんだなということを実感しはじめた。3日目には店で世話してくれる古い民間アパートに移った。

覚悟はしていたものの仕事はつらかった。朝6時半に起きて10分ですべての用をすませ走って駅まで行き、地下鉄に乗る。店に着くのは7時30分、まず200人分のおしんこを小皿200個に分ける。それから100人分の温泉卵をつくる。それから10キロ以上の米を一度に炊く釜で6つご飯を作り、二つはすしご飯として混ぜなければならない。この作業が終わるころに板前さんが一人二人「ウッシ！」と怪しい言葉を交わしながら店にはいつてくるのであるが、それから「戦争」が始まる。配達屋がその日に使う野菜をもってきたり、麺類をもってきたりするのがその頃だ。配達屋がもってくるきし麺をほぐすのも私の仕事だ。冷たい冷蔵庫から出てきたきし麺は、すぐにほぐさないとくっついてしまうのでそれをやらなければならない。それが終わると、店員の朝食の支度をしなければならない。朝ご飯は10時半に食べるようになっていたが、食事が終わって洗い場にもとると、それまで板前さんがつかった器具類がやまほど炊事場に溜まっている。それをせつせと洗ううちに昼がくる。昼はまさに「戦争」だ。3、4百人分の定食を出す。下げてくる食器が山ほど溜まったりすると店長が洗い場を手伝ったりするが、「皿、皿」とか「れんげ、れんげ」とみんなが走り回る。

午後一時半を過ぎるとやっと騒がしい雰囲気が静まるのだが、それまでに溜まった寿司のいれもの（木制）とか、板前さんが昼の間つかっていた器具類をあらう。3時近くになって初めて腰をまっすぐに伸ばす「暇」が訪れるが、それからはゴミを出す番である。毎日昼だけでも生ゴミが7袋（大きい黒い袋）出るが、それを台車に乗せて外に出る。その時は白い服も完全に汚れていて、自分が惨めで汚いと思った。ただ、嬉しかったのは太陽の光を浴びることのできるのはこの時間だけだった。

ほんの数分間だったが、太陽の光をそれほど眩しく、暖かく、ありがたく感じたことはなかった。私はガラスの泣き声は大嫌いだったが、カラスの泣き声が新鮮に聞こえる。自動車の騒音を聞きながら、私が世の中に存在していることを確かめたりした。

午後と同じパターン。仕事が終わる板前さんのやつらが、どこかで一杯やり騒ぐ頃、11時まで仕事は続く。食器とか器具類、洗い場の床などすべてを洗い、板前と、雑きん類を漂白剤につけると仕事は終わる。それからシャワーを浴びて家に帰るのであるが、外の空気を思いっきり吸い、夜空を眺めながら中国のことやら友達のことを考え出した。そこで何度となく思ったもんだ。「これでいいのだろうか」と。手紙を出す時間もなく、一ヶ月2日間休むことは許されているものの、いつ休めるかも知らない。

時間が経つにつれ手と腕が、洗剤にやられて白い斑点ができてしまい、傷だらけになって段々鈍くなった。仕事を辞めて一年が経つまでに人の前に手を出すのが恥ずかしいくらい醜くなっていた。長時間立ちばなしだったので足が痺れ、痛みでよるもぐつすりとおねむれなかった。

こういう状態は8ヶ月間続いた。苦勞をしたというのは自慢でもなんでもないが、私は、

いつも「私の体力、意志、闘志を試してみよう」と喜んで逆境に立ち向かった。ただ、いくらばかであっても、それが好きでやったわけではない。そればかりやっているうちに月日がたち、体力を消耗してしまい、頭まが鈍くなったらそれでおしまいだ。仕事そのものが目的であつたら、私だって1日もそんなことはやらなかった。

我慢するのはつらいが、奇跡は起こる

その仕事場を抜け出せなかった最大の理由は、他の仕事がなかったのでも、他の仕事が出来なかったからでもなく、そのレストランを経営する社長が私の「保証人」となっていたからであつた。そこで働くことを条件に入国手続きも、その後の保証もたててくれたわけである。

自分の体力、精神力の限界を味わうことのできるチャンスはそんなにない。日本にきてそれを試すことができた。日本でのスタートは最低のラインだった。地獄を味わうこともあった。問題もいろいろあった。例の彼（残留孤児）は、研修ビザであれば、14時間働くことができるし、学費もかからないからそれにすべきだと勧めたり、2ヶ月目からは毎月3万円をよこせと迫ったりした。例の室長は、その会社に就職することを勧めたりしたが、それよりもっと頭の痛かったのはやはりビザの問題だった。入国時に72日間の滞在許可をもらいましたが（「旅行」ビザ）、2ヶ月目にそれを「研修」ビザに切り替え、それをまた「就学」ビザに変更、8月目には「留学」ビザに変えた。

この8ヶ月間は私の人生において一番つらかった時期だったが、それだけ内容の濃い時間でもあった。このような「人間修業」はだれもできるものではない。

（1ページより）

ろ在来味噌などは大正時代の味だぞーとあざ笑われることさえある。（その故か僕には昔のアジのままの年輩の友人が多い。味噌離れの若僧とはもはや息が合わない年になったのか）。昭和年代からこぞってバターくさく、カレーっぽくなってきたように感じる。

山東味噌であれ、日本味噌であれ、在来味噌とはひと味違うのは確かなようだ。ただ、山東のは粘りが足りないし、日本のはあっさりしすぎる。どれも奥深い在来味噌の体に滲みような後味は伝わってこない。

とはいうものの、ただ自分で味わうだけでは寂しい。味の素のように世界に広がり、コーラのように世界を溺らすのも面白そうだ。また、孫社長のように、趙名人のように在来味噌パワーで世間に名を馳せるのも嬉しいことだ。そして、いよいよ天池の人達の本番がやってくる。みんなでいっそうのこと天池に味噌を入れて全世界の民衆に味噌チゲをつくってあげようではないか。手作りの故量産はできずにいるが、その日の到来が待ち遠しい。

未・完・の・裁・判

李 東哲（吉林）

今からちょうど5年前の1994年のことである。当時、私は高田馬場駅近くにあるICC日本語学校という語学学校でかなりいい時給をもらいながら横浜国立大学大学院修士課程に籍を置いていた。また週に1回横浜の名門女子大・フェリス女学院大学で非常勤講師もしていた。日本人のいやがる「二股かけ」をしのぐ「三股かけ」だった。従って、扶養家族を3人抱えての暮らしではあったが、生活の面でそれほど苦労はしなかった。

それがどういうきっかけだったかもう忘れてしまったが、家の近くの「一寸一休」という飲み屋でアルバイトを始めることになった。週に3回6時半から10時までで、時給800円だった。もちろん履歴書には大学院生とだけ書いた。「三股」までかけて飽き足らず、さらに「一股」増やして「四股」までかけようとしたその心理をどう解釈したらいいか自分ながら理解に苦しむ。もう少しお金が欲しいという欲望が働いたことは否めないが、それまで来日5年も経っているというのに、外国人のほとんどが経験する飲食業界やサービス業界などでアルバイトをしたことがなかったのでちょっと変った仕事をしてみたいという心理的作用もあったことは事実である。

店は来客もわりと少なく、あまり忙しくなかったうえに、仕事が終わるとおいしい天井が食べられたのでそれほど抵抗感なしに仕事が続けられた。もっとも心配なのは仕事中心が一知り合いにでも出くわしたらどうしよう、という危惧だった。曲がりなりにも大学の教師が飲み屋でホールだか調理補助だかわからないアルバイトをすることなんてとても恥ずかしい行為だと思っていた。幸いなことに、そこを止めるまで知り合いに会わずにすんだのだが。

ところで、たぶん親の金婚式だったと思うが、その年の3月に家族全員一時帰国することになった。店で働きはじめてまだ1ヵ月満たない時だった。給料日の数日前だったので給料がもらえないまま、休暇をもらって2年ぶりの中国へと旅立った。

親の金婚式祝いは8人兄弟全部揃っての盛大なものだった。地元の副県長（日本の市長助役に当たるだろうか）を含め、親類や知り合いなど約200人が祝賀会に参加してくれた。延迎テレビ局からも取材に来てくれたおかげで私も生まれてはじめて地元のテレビに顔を映すことができた。

日本に戻った翌日から早速飲み屋に働きに出た。その日の仕事が終わって2月分（正確には2月19日から3月15日までの給料）の給料袋をマスターと呼ばれる「老板」からもらい、中身を確かめもせずポケットに突っ込んでいい気分になって鼻歌を歌いながら帰宅した。自転車で5分とかからない距離だった。家に帰って給料袋を開け、明細書を目にした途端、私は自分の眼を疑った。「前貸金」として2回にわたって、それぞれ2,000円と5,500円で計7,500円が給与から天引きされていた。もちろんマスターから1銭も借りた覚えもなければ、借りる理由もなかった。正直、それまで三十数年

生きていて、「友人」などに騙されたりして何十万円を棒にふったことはあっても、他人から借金したことは一度だになかった。それなのに7、500円というちっぽけな金を働きはじめたばかりの店で前借りすることなんて想像すらできないことだった。もし、借りようとしても貸してくれなかっただろう。

翌日、朝一番で店に駆けつけ、マスターに理由を質した。「レジからその分足りなかったので給与から引いた」とマスターは涼しい顔で何もなかったように答えた。私がいるあいだにレジから金がなくなったということだった。前貸金は2月25日と3月18日となっていたが、2月25日といえば私が一時帰国するずっと前のことだ。もしレジから金がなくなったのは事実ならその時点で言わないのがおかしい。それを2週間も3週間も「黙って」いて、給料から差し引くことはあるまいと私が「抗議」すると、マスターはうやむやにお茶を濁した。1時間近く言い争ったがちがいがあかず、一旦帰ることにした。そんなところで続けて働くことができなかったのもその場で止めることを「宣言」した。

○ ○ ○

しかし、考えてみればみるほど腹の虫が治まらなかった。大した金額ではなかったが、まるでこそ泥あつかいされるのがどうしても許せなかった。外国人に対する侮辱としか思えなかった。

だからといってすぐにはそれといった妙策も思い浮かばなかった。一度友人が親戚のものを呼んできて店に押し掛け、マスターを懲らしめてやろうと考えたこともあったし、時にはオートバイで店に突進し、めちゃくちゃにしてやりたい衝動に駆られたこともあった。だが結局、何一つとして実践できなかった。大学の教員というメンツもさることながら、法に触れることはあまりやりたくはなかったし、それまでほとんど喧嘩ということを知らずに育ったせい、実のところ無茶をやれる勇気もなかった。

そこでふと思い付いたのはまず労政事務所だった。早速品川労政事務所を訪ねた。対応に出てきたのは30代の男だった。簡単に前後の経緯を話し、何か解決策がないかと打診した。男は親切にいろいろと相談に乗ってくれてはいたが、もともと被害金額も少なかったし、労政事務所ではたとえ先方が不法行為をしたとしても、財産を差し押さえることなどできない、ということだった。そこでそういう権限を持つところを紹介されたのが労働基準監督署だった。その足で大田労働基準監督署へ向かい、来訪の目的を係員に告げた。労働基準監督署もあまり頼りにならないと思ったが、とにかく必要な手続きを終え、連絡を待つことになった。

約1週間たって労基署から電話連絡が来た。労基署は家からそれほど遠くなかったので自転車を漕いで詳しい話を聞きに行った。係員の話によると、店に何回も電話して呼びつけたにもかかわらず、出頭しないので担当者がわざわざ店まで行ってきたが、マスターは頑として自分の非を認めようとしなかった、ということだった。今回だけでなく、前にも同じような給料支払いのトラブルが同じ店で起こったようだ。すでに「前科」のある「犯人」だった。ただいずれも金額が少ないだけに、裁判沙汰にもならず、被害者が泣き寝入

りするしかなかったらしい。当の本人が認めない限り裁判にかけられない、というのが労基署からの最終的な結論だった。

途方に暮れているところへ、区役所に区民法律相談所が設けられていることを偶然知った。「毒を食らわばさらまで」ともう向きになった。貴重な時間をかけてやりはじめたからには途中で止めるわけにはいかなかった。

法律相談所には相談に来た人がかなりいた。午後2時ごろやっと順番が回ってきた。空腹を堪えて相談室に入り、弁護士と向かい合って坐った。フンフンといいながら事件の経過を聞いていた偉そうな「先生」は最初からまともに相手にしていない、と私は直感した。たったの7、500円のために裁判うんぬんという人こそ却ってどうかしている、と鼻で笑っているようだった。「先生」の頭には被害金額の多寡のみあって「人権」にかかわる問題は毛頭なかったようだ。とにかく「先生」からもそれという助言を得られないまま、がっかりして家に帰った。そこで初めて日本の労政事務所だの、労働基準監督署だの、はたまた法律相談所といった、行政機関の無力さを体験したのだった。

○ ○ ○

そうこうしているうちに問題解決の糸口が見つからないまま、半年くらい経った。当時私はたまたま朝日新聞を購読していたが、「声」欄にたまに外国人の投稿もあることに気がついた。それまで「声」欄によく目を通しながらも、自分には縁もゆかりもないものとして見過ごしてきたのだ。すぐ600字くらいの投稿原稿を作成し、「声」欄に投稿した。すると、2、3日経って妻から突然勤務先の大学に電話がかかってきた。朝日新聞社から電話をしてほしいと言ってきたということだった。それからおよそ1週間経って、平成6年11月12日付朝日新聞の「声」欄に「バイトの給料引かれ損とは」という見出しで私の日本における初めての投稿が掲載された。原文はかなりカットされ、見出しも私が付けた見出しと違って気に入らなかったが、載せてもらっただけでも有り難かった。

その投稿がきっかけで、私は「骨折り損のくたびれ儲け」の裁判を始めることになった。

大田区に住んでいる、かつて裁判を経験した法律関係に詳しい佐藤という50代の方から新聞社経由で私に手紙を送ってきたのだった。その丁寧でやさしい励ましの手紙に私は深く感動し、早速お礼の電話を入れた。数日後、蒲田駅近くの喫茶店で佐藤さんと会い、これからでき得る方策をいろいろと模索した。その後も2、3回会って話し合い、「支払命令申立書」を作成し、東京簡易裁判所に提出した。法律知識ゼロの私は一から十まですべて佐藤さんの世話になった。佐藤さんは裁判所まで同行してくれた。

「支払命令申立書」提出時に「特別送達」料も支払うことになっているが、1回分の送達料は1、040円と高かった。この送達料だけでも前後して5、000円近く支払ったように記憶する。その他交通費、コーヒー代など合わせると、その金額だけで優に7、500円を上回っていた。経済的に見ればすでに「赤字」だった。

それから何ヵ月か経って裁判所から「口頭弁論、期日呼出状」が送られてきた。「口頭弁論期日」は1995年7月14日午前10時となっていた。初めてということで、佐藤

さんはまた同行してくれた。生まれて初めての裁判だけに玄関に足を踏み入れる時から胸がどきどきした。約10時10分前に指定された民事第307号法廷（3階）に入り、待合室？で待ったが、いくら待っても「被告」が現われなかった。結局その日は無駄足を踏むことになった。

数日後、2回目の「口頭弁論期日呼出状」が裁判所から送られてきたが、日付は9月22日となっていた。なぜ1回目と2回目の間が2ヵ月以上もの時間が必要なのか、不思議でなかった。どうも長期戦になりそうだったのでせっかくの「戦意」も半減した。

ちょうどその頃、私は「失業」のうえに「失敗」まで重なり、経済的にも精神的にも一番苦しい時期だった。バブルがはじけ、入管の外国人就学生に対する締め付けが厳しくなると、日本語学校は経営的にどうにもならない危機に面した。すると、最初にアルバイトの私からそのとばっちりを食うことになった。来日した翌年の90年2月から4年近く続けてきた！CC日本語学校を94年の暮れに首になってしまった。校長や事務局長を含め、事務の中では私が最も古株でベテランだったにもかかわらずだった。前から社員になってほしいと勧められたが、「日本語学校なんか前途がない」とうそぶいてあっさりのことわった。社員になっていたならたとえ首になったとしても失業保険の給付を受けたはずなのに後悔の念もなくはなかったが、いまさら後悔しても後の祭りだった。

それに先立ち、5年間教えていた大学の非常勤も95年3月で止めることが決まっていた。客員研究員として韓国の中央大学に行くつもりで手続中だったので、新年からは講義が続けられないと学科主任に辞退の意を伝えた。中央大学からはすでに招請状が下りており、留学がほぼ固まったと思いこんだからだ。だが、韓国行きは無残にも失敗に終わってしまった。受け入れ部署の所長がゴーサインをしてくれなかったそうだ。

そこで、何よりもまず食べていくための仕事探しが急務だった。7、500円のために貴重な時間をつぶしていつ終わるか知りもしない裁判をやっていく暇も気力もなかった。

それでも9月22日に裁判所に行くことにした。なるようになれと「法律顧問」の佐藤さんには何もいわず一人で出かけた。指定された法廷に入ればしばらく待っていると、裁判長が出てきててきばきと案件を処理した。その時、一人の老紳士が私を呼んで別室に連れて行った。今ははっきり覚えていないが、埼玉県かどこかに住んでいる弁護士で裁判所から私たちの調停を頼まれたということだった。「和解する気があるかどうか」というようなことを聞かれたと思う。私は被告が被害額を返し、自分の非を認めるなら和解を考える、と答えた。すると私と入れ代わりに被告が呼ばれて行った。ややあってまた私が呼び出され、和解するよう説教された。被告は自分の非は認めるが、金は出したいというらしかった。自分の非を認めるのなら金を出すのはあたりまえじゃないか、と私も譲らなかった。業を煮やした調停人は、今度は私と被告を同時に呼んで和解勧告したが、やはり被害額をどうするかで折り合いがつかず、物別れとなった。それでも調停に立った紳士はあきらめず、もう一度私を呼んで懇切に勧告した。結局、上で述べた生活の問題もあり、たとえ1年も2年もかけて裁判に勝ったところで利益になるものは何一つないことを「悟

った」私は一歩譲って被告に「反省文」を書いてもらい、それに押印をしてもらうことで和解することにした。被告もあっさりこの条件を呑み込んだ。そこで「和解」が成り立ち、裁判があっけなく終了した。「和解条項」はこうなっていた。

一、被告は、原告に対し、本件について、深く謝罪の意を表明した。

二、原告は本訴請求を放棄する。

三、当事者双方は、本和解項に定めるほか、何らの債権債務のないことを相互に確認する。

四、訴訟費用は各自の負担とする。

これで一応裁判は公的には終了し、私は精神的に勝訴したものの、まったく納得できなかった。法治国家を称する日本なのに、なぜこのような事件を妥当に解決できる法的な措置がないのか。だからこそマスターのような悪質な経営主がその隙間に付け込んで堂々とせこい悪事を働くのではないか、という日本法律への不信感はいつまでたっても脳裏を離れなかった。「給料から天引きするのは違法行為であることを知らないですか！」と裁判長が最後に残した威厳ある言葉も私には何の意味もない、空々しい「飾り」としてしか響いてこなかった。

事件番号 平成 7 年 (ハ) 第 3877 号
東京簡易裁判所民事第 2 室 1 係
裁判所書記官 水野 謙

口頭弁論期日呼出状

原告 李東哲 被告 山田昌司
貸金 請求事件

この事件の口頭弁論期日が、
平成 7 年 9 月 22 日 午後 10 時 00 分
と定められましたので、
当裁判所 民事第 307 号法廷 (3 階) に必ずお越しください。

〈注 意〉
1 この事件に関して提出する書面には、事件番号と室・係名を書いてください。
2 上記期日にお越しになる際は、この呼出状と印鑑 (認め印) を持参してください。

(問い合わせ先)

〒100

東京都千代田区霞が関一丁目1番2号

東京簡易裁判所 民事第 2 室 2 係

☎ 03-3581-5411 (大代表)

レジスターの中のお金の不足分
を本人に無断で給料から差し引い
た事は良くないことと深く反省
しております。

本人の責任にしたいことは私のまち
がいでした謝罪いたします。

平成 7 年 9 月 22 日
李東哲様 山田昌司

「わたしと朝鮮語の出会い」 蜂須賀 光彦

私が朝鮮語を勉強していると言うと、ほとんどの日本人は不思議そうあるいは怪訝そうな顔をして「いったいどういう動機で？」と尋ねてくる。隣国、隣の民族の言葉であるにもかかわらず朝鮮語を学ぼうとする日本人の絶対数が圧倒的に少ないのは、不幸な過去の歴史的経緯や背景にもとづく日本人の歪んだ偏見や根拠のない民族的優越感に囚われるものだろう。日本人としてはまことに腹立たしく恥ずかしいばかりだ。しかし一介のサラリーマンである私が朝鮮語を学び始めた動機は、決してそのような高邁なものではなく極めて単純な動機であった。

1988年のソウル・オリンピックを前にして、NHKでもアンニョンハシムニカ・ハングル講座が始まり、ささやかな韓国語ブームが起きていた。私もそれに便乗した口で、親しい仲間と初めての韓国旅行に際してほんの少しばかり片言の観光用会話を勉強して行った。初めての韓国はその圧倒的なエネルギーとパワーとスピードに驚くことばかりだったが、私が片言の韓国語を話すと誰もが一樣ににっこりと微笑んで「ウリマルル コンブヘジュソソ コマップスムニダ」と言葉を返してくれて、まるで我が子のようにあれこれと世話をしてくれる。何と情に満ちあふれた心温かい民族だろうと感嘆するとともに、懐かしさにも似た感情と日本人もかつてはこのような民族ではなかったのかと、人間関係が希薄化した日本社会の一員としての自責の念にも駆られた。まずは言葉からだ。我々日本人が真摯に胸襟を開いて言葉を学ぶことが、両民族が真に理解しあえるための第一歩だと確信した私はその日を境に、辞書や語学書を買って独学で朝鮮語に取り組み始めた。

「シジャギ パン（始まりが半分だ）」という言葉に励まされながらも、最初は一見とっつきやすい朝鮮語ではあったが、独学ゆえかすぐに大きな壁に突き当たってしまった。何度も断念しようかと思ったが、やはり上達にはよき先生とよき学友が必要であろうと思うに至った。そこで朝鮮語が学べる塾があることを偶然知って、そこに一度足を踏み入れてみることにした。

そこは代々木にある「現代語学塾」というところで、木造の築五十年以上にもなるオンボロ長屋の一室であった。ここはかつての金嬌老事件（1968年、在日朝鮮人金嬌老が起した殺人事件。裁判において民族差別問題を日本社会と国家に訴えた）の公判委員会がおかれたところで、彼の終身刑が確定した後に民族の言葉を取り戻そうとした在日朝鮮人金嬌老の精神を受け継ぐかたちで、自主運営の朝鮮語の塾として始まり、現在もなお三十年近いの歳月にわたって続いている。半年間で三万円という学費の安さも魅力ではあるが、何といても朝鮮語ばかりでなく、その歴史、文化、人間などに限りなく興味を寄せる日本人と在日の生徒と講師の和やかな中にも熱気を帯びた授業（そしてその後の飲み会）はとてもエキサイティングで有意義なものであった。語学そのものよりむしろそのような人々との出会いが大きな財産になったような気がする。

昨年舘野哲さんに声をかけていただいて「聞き書き中国朝鮮族生活誌」（社会評論社刊）の翻訳作業に参加した。金勲（北京大学副教授）さんたちが中国（遼寧省、吉林省、黒竜江省）へ移住してきたハラボジ、ハルモニたちの生の言葉を直接取材したもので、筆舌

に尽くしがたい苦労を重ねながら朝鮮から中国へと移住した経緯や思い出話が朴訥な口調で語られている証言集である。取材は十年以上前にフィールドワークとして行なわれたもので、体験談を話された老人の中では現在も存命の人のほうが少ないかも知れない。資料としても実に貴重なものだ。断腸の思いで祖国を捨てざるを得なかった事情はさまざまではあるが、共通して言えることは直接、あるいは間接的な日帝の植民地政策の苛酷な収奪に耐え切れずに脱出したということだ。

十年あまりも朝鮮語を勉強してきたのに恥ずかしい限りだが、私はこのへんの事情すらあまりよくわかっていなかった。なぜ中国に朝鮮族がたくさん住んでいるのか？ 私も含めて日本人はほとんどがそのことを知らない。その根本的な原因が自らの民族にあるにもかかわらず。また私の知る限りでは韓国人にも（学校では教えてくれなかったから）知らないという人が数多くいる。

先日、天池クラブの集い（シンポジウム）に参加させていただいたが、実に楽しく有意義な集まりだった。そこで日本で活躍されている中国朝鮮族の方々、あるいはアルバイトなどで苦勞しながら学んでいる中国朝鮮族の方々の姿に接して感慨を新たにした。そして韓国や日本で冷遇されたり、理解されなかったりした体験談などを聞くに及んで、韓国・朝鮮、中国、日本という三つの国と民族の狭間で、自らの拠り所、身の置き所、アイデンティティなど複雑な思いに揺れ動く中国朝鮮族のみなさんの姿を垣間見たような気がした。しかしこれからはどこにも属さない中国朝鮮族独自の、さらには在日中国朝鮮族としての確固たるアイデンティティと日本社会に対してその存在を強くアピールする必要があると思う。

ひるがえって考えるとこの三国はいずれも現在経済的な危機に直面している。ユーロの登場で欧州共同体が再びアメリカに次ぐ第二の経済大国となりそうな世界情勢の中で、経済においてだけは東アジアは運命共同体として、共通貨幣を作り相互の関税を撤廃するなどして早急に経済共栄圏を作るべきだとの議論が急浮上している。その是非は私にはよくわからないが、いずれにせよ必然的にこの三国が今後さらに緊密な関係を築かなければならないことだけは確かだろう。中・朝・日の三ヶ国語を駆使して、三ヶ国を客観的に見ることが出来る在日中国朝鮮族のみなさんこそ、まさしくその牽引車となるにふさわしい人々だと私は考える。また我々日本人も最大限それをバックアップすべきだし、私自身も微力ながら一個人として、その一助になればと願っている。

生意気にも偉そうなことを書いてしまったが、朝鮮語を学び始めたことがそれまで見えなかったことに目を見開かせてくれたし、逆に言えばどの国、どの民族の言語を学ぶにしてもその国、その民族に対する愛情がなければ決してその言語を身につけることはできないと思う。私自身も朝鮮語、そして中国朝鮮族のみなさんとの出会いを生涯大切に培っていきたいと願っている。

녀류시인 황진이의 금강산유람

안재청 (조선)

황진이는 16세기에 활동한 우리나라의 이름있는 녀류시인이다. 그는 개성에서 살던 량반 황진사의 첩의 딸로 태어났다. 호는 명월이었다. 황진이는 용모가 아름다운데다가 어릴때부터 노래와 서예에서 재능을 보여주었다. 그리하여 그에 대한 소문은 름근 각지에 퍼졌고 적지않은 일화들도 남기였다.

그가 15살나던 해에 한동네에서 살던 총각이 짝사랑하던 나머지 상사병에 걸려 죽었는데 총각의 상여가 황진이의 집대문앞에 이르자 말뚝처럼 굳어져 움직이지 않았다. 총각이 죽은 사연을 알고있던 한 친구가 황진이의 집으로 뛰어들어가서 그에게 전후사실과 방금 상여가 땅에서 떨어지지 않는다는것을 이야기하였다. 크게 놀란 황진이가 소복단장을 하고 달려나가 자기의 치마를 벗어 관을 덮어주었는데 그제야 상여가 움직이였다고 한다. 또한 이 일이 그가 기생으로 된 동기로 되었다고도 한다.

황진이는 비천한 첩의 딸로서 온갖 멸시를 받으며 규방에 묻혀 일생을 헛되이 보내기보다는 차라리 봉건적류리의 질곡속에서 벗어나 자유롭게 살기를 원하였던것이다. 그 결심을 실천하자면 당시 그의 신분으로서는 기생으로 되는 길밖에는 다른 출로가 없었다. 그리하여 그는 어머니에게 이 자식은 죽고 없는것으로 알아달라는 한마디를 남기고 집을 뛰쳐나가 기생이 되었다.

재색을 겸비한 황진이의 이름은 곧 팔도에 알려졌다. 그때 개성에는 철학자로 유명한 화담 서경덕과 《생불》로 자처하는 만석이라는 중이 있었다.

황진이는 지조가 굳고 인품이 고결하다고 소문난 학자와 중의 의지를 시험해보리라 생각하고 먼저 화담 서경덕을 찾아가서 제자가 되기를 청하였다. 화담은 두말없이 쾌히 승낙하였다. 황진이는 얼마동안 다니다가 하루는 날이 저물었으므로 선생이 거처하는 방에서 자고가기를 청하였다.

화담은 천연히 승낙했다. 그날 밤 황진이는 피곤한척하면서 팔을 그의 가슴우에다 올려다놓기도하고 다리를 그의 배우에 올려놓기도 하였다. 그럴 때마다 화담은 《허, 몹시 피곤한 모양이로군.》하면서 팔과 다리를 조용히 들어바로 놓아주곤 하였다.

그후 여러해를 황진이와 화담은 한 처소에서 지내면서 때로는 자리를 같이하기도 하였으나 화담은 끝내 스승으로서의 한계를 넘지않았으며 황진이로 하여금 오직 글을 읽고 쓰는데만 전심하도록 가르쳤을뿐이었다.

화담 서경덕의 고결한 인품에서 깊은 감동을 받은 황진이는 그의 술하를 떠나 이번에는 만석을 찾아갔다. 그는 천마산에서 10년동안 도를 닦고 화담보다 자기 지식이 높다고 자랑하는 중이었다.

황진이가 찾아가 도를 닦는것을 청하자 만석은 눈을 감은채 화를 내며 《지족선사는 원래 녀자를 가까이 하지 않는다.》고 단마디로 거절했다.

며칠후 청상과부모양으로 소복을 하고 절간으로 찾아간 그는 만석의 바로 곁방에 자리를 잡고 죽은 남편을 위해 백날불공을 한다고 하면서 매일밤 남편의 명복을 비는 글을 지어 아름다운 목소리로 랑랑히 외웠다. 만석은 처음에는 태연한채 아무런 반응도 보이지 않았으나 하루이를 지나는 동안에 황진이의 아릿다운 자태를 엿보고서는 끝내 참지못하여 불교의 계를 어기는데 이르렀다. 그때부터 《십년공부 나무아미타불》이라든가, 《만석중 놀리듯하다.》는 속담이 새로 생겨났다고 전해온다.

당시 개성사람들은 용모와 예술적재능이 뛰어난 황진이를 화담 서경덕, 박연폭포와 함께 송도 3 절 (3가지 뛰어난것)로 꼽으며 자랑하였다.

원래 량반계급이 절대화하고있던 봉건적유교도덕의 속박을 싫어한 황진이는 주로 남녀간의 애정을 짙은 서정으로 섬세하면서도 자유분방하게 노래한 시조 작품들을 많이 남기였다.

청산은 내뜻이요 록수는 님의 정이

록수 흘러간들 청산이야 변할손가

록수도 청산 못잊어 울어예어 가는고.

이 시조는 그러한 대표작의 하나이다. 황진이는 이와 함께 박연폭포와 같이 크나큰 긍지를 가지고 조국의 아름다움을 노래한 시도 썼다.

그는 경치좋은 곳을 유람하기를 좋아하였다. 그러한 황진이가 세상에 소문난 금강산을 찾지 않을수 없었다.

어느날 그의 명성을 듣고있던 서울의 한 젊은이가 개성으로 놀러 왔다. 그도 유람을 좋아한다는 이야기를 듣고 황진이는 같이 금강산구경을 가자고 하면서 이렇게 말하였다.

《이웃나라 사람들도 고려국에 태어나 금강산을 한번 보는것이 원이라 하였거든 우리 조선사람으로서 제 나라에 있는 금강산을 못본다면 어찌 수치가 아니겠소. 우연히 당신을 만나보니 가히 등무하여 유람을 갈만하오.》

젊은이도 반기며 선뜻 응해나섰다.

황진이는 번다한 행장을 다 버리고 굵은 삼베치마저고리를 펼쳐입고 망태를 졌으며 손에는 지팡이를 쥐였다. 같이 가는 젊은이 또한 무명옷에 삿갓을 쓰고 량식을 등에 짊어졌다. 얼핏보면 허물없는 오랍누이동생같은 그들의 차림새에도 까다로운 남녀간의 례의범절을 벗어나 금강산의 경치를 마음껏 즐기려는 황진이의 섬세한 심정이 담겨있었다.

유람길에 나선 그들은 수백리 먼길을 걸어 금강산에 이르렀다. 과연 소문 그대로의 금강산의 절경에 접한 그들은 이루 형언할수없는 기쁨에 휩싸였다.

날마다 희열에 넘쳐 금강산의 명소들을 찾은 황진이와 젊은이는 서로 노래도 부르고 화답시도 읊으면서 산천경계를 즐겼다. 꿈속에서처럼 날은 흘러 어느덧 가지고 떠난 약간의 로자도 다 떨어져 그들은 굶다싶이 되었다. 그들의 얼굴은 초췌해져 말이 아니었다. 게다가 연약한 여성의 몸으로 험준한 산밭을 타고 넘다나니 황진이의 발에는 로독까지 생겼다.

앞친데 덮친 격으로 황진이는 젊은이의 종적마저 잃게 되었다. 아무리 애타게 찾아보았으나 그가 간 곳을 알수 없었다.

그러나 금강산을 다 돌아보지 않고서는 쉽게 떠날 황진이가 아니었다. 그는 로독오른 다리를 끌고 민가나 절간들에서 밥을 빌어먹으면서도 금강산의 명소들을 다 돌아보고서야 그곳을 떠났다.

그는 내친 걸음에 태백산을 거쳐 우리 나라의 5대명산의 하나인 지리산까지 구경하고 돌아오는 길에 전라도 라주에 이르렀다. 마침 그곳에서는 라주목사가 큰 잔치를 벌리고있었다. 라주는 물론 부근의 명창들까지 구름같이 모여들어 노래를 부르는바람에 집이 떠나갈듯하였다.

황진이는 말도 없이 잔치판에 슬며시 끼여들어 아름다운 목소리로 노래한곡조를 건드려지게 불렀다. 때아닌 고운 목소리에 명창들은 입을 다물었고 목사이하 좌중은 물뿌린듯 조용해졌다.

행색으로 보아 미친년이 분명한데 어디서 저런 노래소리가 나오는가가 의문되어 모두들 황진이를 쳐다보기만 했다.

이윽고 목사가 통인을 불러 그의 신분을 알아보게 하였다. 그가 다름아닌 팔도에 이름난 송도의 명기 황진이임을 알게 된 목사는 그를 가까이 불러올리고 잔치의 귀빈으로 모셨다. 그리하여 황진이는 금강산유람을 떠난 이래 처음으로 릉승한 대접을 받게 되었고 집으로 무사히 돌아왔다고 한다.

이처럼 자기 생애에 많은 일화를 남긴 녀류시인 황진이는 마흔살을 전후하여 세상을 떠났다. 그의 금강산구경에 대한 이야기는 사람들의 입을 통해 후세에 전해오고있지만 다만 금강산을 노래한 황진이의 시가 없음이 유감일 따름이다. (『문화산맥』에서)

中国職業足球觀戦記

—わが心の延辺敖東隊—

谷川 雄一郎

1997年8月3日は延辺大学留学生生活のなかでも忘れられない一日となった。中国プロサッカーリーグ「甲Aリーグ」第13節の8月3日、地元のプロチーム延辺敖東^{テンビン}は延吉市人民体育場で大連万達^{ワンタン}を迎えての一戦を行った。3月16日にリーグ戦が開幕して以来、万達は首位を独走し、10勝0敗2引き分けと破竹の快進撃を続けていた。目下46試合連続不敗記録を更新中で、国家代表選手も多く擁している強豪チームである。一方の敖東はこの日まで4勝4敗4引き分け、甲A12チーム中第6位につけていた。第二ステージに入ってから調子が上向いてきたものの、万達との実力差は歴然としており、下馬評ではもっぱら万達の不敗記録更新がささやかれていた。それでもこの一戦を観戦しようと、競技場には多くの熱心なファンが詰めかけた。試合開始は午後4時からだったが、2時頃になると観客席の7~8割はすでに埋まっていた。

灼熱の太陽が照りつけるなか試合開始を待っていると、やがて選手たちを乗せた大型バスが場内に入ってきた。観客席からは一斉に拍手と歓声が上がった。観客のほとんどが敖東ファンだ。トラックを半周したバスはホームストレッチ前で監督・選手を下ろした。遠くから彼らの姿が見えた。最初に降車したのは監督、崔殷澤だ。彼は今年から敖東の監督に就任した韓国人で54歳、韓国漢陽大学でサッカーを教えていたという学究肌の監督である(ちなみに崔監督はリーグ終了後、延吉市名誉市民になった)。監督に続いて選手たちが次々と降りる。ザイル籍の助っ人外国人、ブライマーとゾラとおぼしき人物が見えた。外国籍以外の選手は大部分が朝鮮族で、その他に漢族や満族の選手が数名いる。甲A12チームのなかでは唯一少数民族を主体とするチームであり、これは延辺朝鮮族の誇りともなっている。下宿のアジョシ曰く、延辺が試合に勝つと他の少数民族からもお祝いのメッセージが届くとのことだった。

さて、午後4時、酷暑もやや薄らいだなか、いよいよキック・オフとなった。さすが万達、出場選手のなかには郝海東、孫継海といった現役の国家代表選手がいるだけに動きが速く、技術にも長けている。だが敖東もよくねばり、前半戦は0対0で折り返した。試合が動いたのは後半に入ってからだった。20分、敖東のベテラン高鐘勲から絶妙のパスを受けたゾラが見事に鮮やかなゴールを決めた。なんと敖東が先制点をあげたのだった。観客席は大いに盛り上がった。ウェーブが何周もスタンドを廻った。そしてそのわずか数分後、今度は今シーズンに入ってからメキメキ頭角を現し始めた若手の一人、黄東春が横へのドリブルからうまいミドルシュートを放ち、ゴール。2対0!この瞬間、スタンドは「ウォー」という歓声に包まれ、盛り上がりは最高潮に達した。誰もが敖東の勝利を確信したかのようだった。私自身も半分信じられないような気持ちになりながらも、今度の『足球報』

にはどんな活字がおどるのだろう、「敖東、万達の不敗神話にピリオドを打つ！」だろうか、「長白虎、ついに牙をむく！」だろうか、などと日本のスポーツ新聞のノリで勝手な想像をはたらかせていた。

しかし、勝負の世界は決して甘くはなかった。王者の逆鱗に触れたのか、万達の反撃の勢いはすさまじかった。30分、郝海東からのパスを受けた李明がゴールを決め、すぐに1点を返されてしまった。しかしそれでもまだ2対1。あと15分、どうかこのまま逃げ切ってくれと、ハラハラしながら祈っていたそのわずか2分後、今度は王濤が頭で合わせ、ゴール。あっさり同点に追いつかれてしまった。王者相手に2点を先制し、選手たちは少し気が緩んだのだろうか。キーパーのブライマーが「なんてことだ」と言わんばかりのやるせない表情を浮かべていたのが印象的だった。同点に追いつかれた瞬間、観客席からは「ああっ」というため息が漏れ、数分前の興奮とはうって変わって重苦しい雰囲気となった。しかし、「延辺隊、加油（がんばれ！）」という漢語の掛け声と「クロッチ！（よし！）」「バリチャラ！（早く蹴って！）」という朝鮮語の声援が入り混じる観客席で人々は最後まで望みを託し、一生懸命応援した。

その後、両チームとも何度かチャンスはあったものの得点には結びつかず、引き分けのまま試合終了となってしまった。敖東は惜しくも勝利は逃したものの、見ごたえある試合内容に観客は皆満足していたようで、試合終了後は選手たちを拍手で見送っていた。前回、済南泰山との試合で負けたときは場内にペットボトルの空き瓶がたくさん投げ込まれていたのだが、今回そのようなことはほとんどなかった（ペットボトルの持ち込みが禁止されたということもあるが）。私自身も、追いつかれての引き分けは何とも残念ではあるけれども、首位の万達を相手によく戦ってくれたと思い、競技場を後にした。

早いもので、あの日からもう1年半という時間が過ぎていった。だが、あの日の興奮はいまでも鮮明に脳裏に焼き付いている。延辺の人々と共に喜び、共にガックリしたことは生涯忘れ得ぬ思い出として、いつまでも私の心に残ることであろう。帰国後も延辺敖東隊のことは折に触れて思い出される。今年の成績、監督や選手の動向はどうなっているのか、日本に来てJリーグのチームと“夢の対決”をしてくれれば……等など。このようにいろいろ想像をめぐらせると、なぜか活力が与えられたような気になり、またがんばって勉強しようという意欲が湧いてくるから不思議だ。気がついたらいつの間にか熱狂的延辺敖東ファンの一人になっていた。今度延辺を訪問するときは、ぜひ延吉で試合のある日にしたいと、なかば真剣に考えている。

いつの日か“長白虎”の咆哮が中国全土に轟かんことを、遠く日本から祈ってやまない。

（作者単位：明治大学大学院）

자연스레 살어리랴다

김광림

살어리랴다

살어리랴다

자연스레 살어리랴다

있는대로, 주어진대로

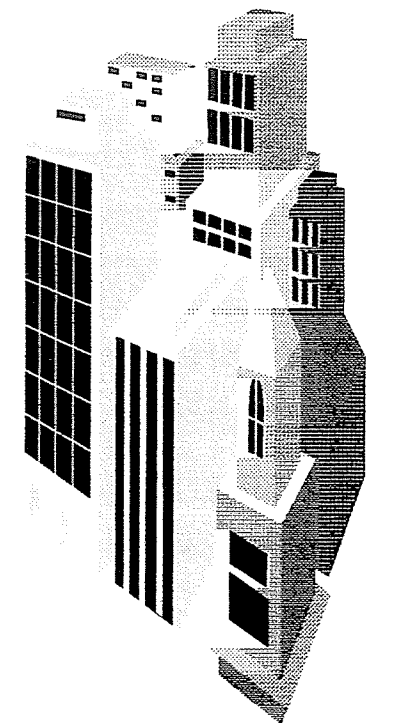
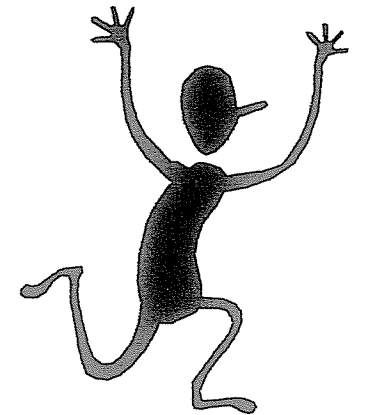
자연스레 살어리랴다.

21세기이다, 글로벌이다,
인터넷이다, 복제인간이다,
아아, 귀찮아
무한경쟁시대 다가오고
사람이 기계되여간다.

천당이다, 지옥이다,
신령이다, 악마이다.
허허, 참
기는짐승이 그런애기 하는가
하늘나는 새가 피씩 웃는다.

문명이다, 야만이다,
人性이다, 獸性이다
아이고,
과육, 폭력에 어느 동물이 따르랴
자연이 당신한테 다 명든다.

무엇때문에 아글타글하는가,
무엇때문에 욕심각심하는가,
금빛나는 재부가 영원하랴
돌에새긴 이름이 거룩하랴
지구가 타다말고 우주에 먼지만 남기는데.



知って得するカード知識

申 淑子

昨年の渋谷での電子マネー実験に続いて、今年の1月4日からは手持ちのキャッシュカードで買い物ができるデビットカードサービスがスタートしました。そこでわれわれも時代に遅れないように、この電子マネーだの、デビットカードだのというものについて理解を深めたいと思います。すでに体験された方も多いかと思いますが、堅い話にならないように、やわらかく、わかりやすくご紹介致します。

1. 電子マネーってどうやって使うの？

渋谷での実験で利用した電子マネーの場合は、

- ・ まずICカード（三種類）を持ち、そのカードにロード機という専用機械から電子的価値を引き出します。簡単に言えば、ICカードを「財布」、ロード機を銀行の「現金自動引出機」、電子的価値を「現金」と考えると、普段我々が銀行から現金を引き出して財布に入れているのと、同じことをしている訳です。
- ・ そして買い物をする時に、店舗レジの端末で電子的価値（つまり現金）を引き出して代金を支払います。クレジットカードと同様すべての店舗で使えるわけではなく、加盟店でのみ利用できます。
- ・ それでは買物をした金額はどのように請求されるのでしょうか。これはカードの種類によって違いますが、使い捨て型はカード購入時に現金で払います。しかし、クレジットカード体型とキャッシュカード型は後日銀行口座から預金引き落とされます。
- ・ 実験予定期間は今年の10月までですが、その後も引き続き使えることになるようです。

2. デビットカードって何？

私達が持っている銀行や郵便局のキャッシュカードで買い物ができる－これが「Jデビット」（愛称）サービスです。使い方は、商店のレジでキャッシュカードを提示し、四ケタの暗証番号を入力するだけで、代金が私達の預金口座から店の口座に振り替わる仕組みです。まだ加盟銀行も使える店舗も限られ我々に馴染みがないですが、10月にはほとんどの銀行カードが使えるようになる見込みです。

欧米や香港、シンガポールなどではデビットカードの普及がかなり進んでおり、最も利用率の高い英国ではクレジットカードの利用率を上回っています。それでは中国ではどうなのと疑問を持つ方が多いかも知れませんが、中国はデビットカードがメインでクレジットカードはまだあまり普及されていない状況です。政府は消費拡大を狙ってクレジットカードの普及を押し薦めているそうですが、リスクを考慮せざるを得ない銀行が慎重な態度をとっているようです。よく聞く「牡丹カード」、「長城カード」もそのほとんどがデビットカードです。

3. クレジットカードとどれが一番便利なの？

・クレジットカード

クレジットカードは買物をして約一ヶ月後に利用金額が口座から振り替えられる、またリボ払いで何回に分けて支払うこともできるということで、高額な買物に便利です。

・電子マネー

小銭代りに便利です。

・デビットカード

「即時決済カード」という言い方もあるが、言葉とおり買物をしたその時点で代金が預金口座から振り替えられ、支払が完了します。小銭代りの電子マネーと、高額利用のクレジットカードの中間に位置するものと考えerといいと思います。現金を引き出す手間が省けるほか、手数料を払って現金を下ろす必要がないわけです。

どうも日本にも利用者がうまくカードを使分けする時代がきたようですね。

4. 電子マネー、デビットカードの将来性は？

電子マネーがまだ本格普及前の実験段階にある中、デビットカードは電子マネーに先駆けて実用化されています。このデビットカードを人間に例えればまだよちよち歩きの赤ん坊といったところでしょうか。これから激しい競争の中を荒波にさらされながら逞しく育ち、将来は人類の為に活躍してくれる有望なお子様でありましょう？！

さて、これらの現金に代わる支払手段が最終的にどのような形で我々の生活の中に定着、浸透するかについてはまだわかりかねますが、キャッシュレス（無現金）時代の到来は確かです。まださまざまな課題はありますが、日本にも買い物をするたびに不潔な紙幣を触らなくても済む時代がもう目の前にまで来ています。いや、すでに幕開けしているかも知れません。まだ、体験されていない方は西武デパート、ビックカメラなどで利用できますので、今持っているキャッシュカードで「Jデビット」してみてください。

(株) ジェーシービー 申淑子

コンピュータ「計算機」基礎講座

コンピュータは幾つかの装置から構成され、それらが互いに関連を持ちながら、それぞれの役割を果たす。人間がコンピュータに記憶させ、その手順によってコンピュータは動作する。この手順のことをプログラム「程序」という。

プログラムは記憶装置「存储器」に記憶され、手順の内容（命令）が順番に制御装置「控制器」に取り出されて実行されます。

コンピュータは、制御、演算、記憶、入力、出力の5つの要素で成り立っている。それぞれを人間の器官に例えると、脳→制御、演算、記憶；目、鼻、耳→入力；口、手→出力。

この他に、補助記憶という要素もあるが、これは、人間が覚えきれないことをノートなどに書いておくのと同じ考えである。

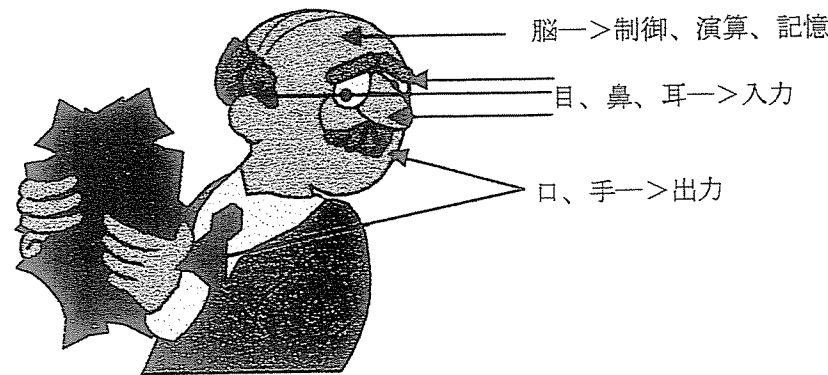


図1 コンピュータの5つの要素

コンピュータは機械そのものであるハードウェア「硬件」と、ハードウェアを動かすプログラムであるソフトウェア「软件」に分けて考える事ができる。コンピュータを動かしたり、利用したりする技術のことをソフトウェアという。ハードウェアの基本構成を図に示す。

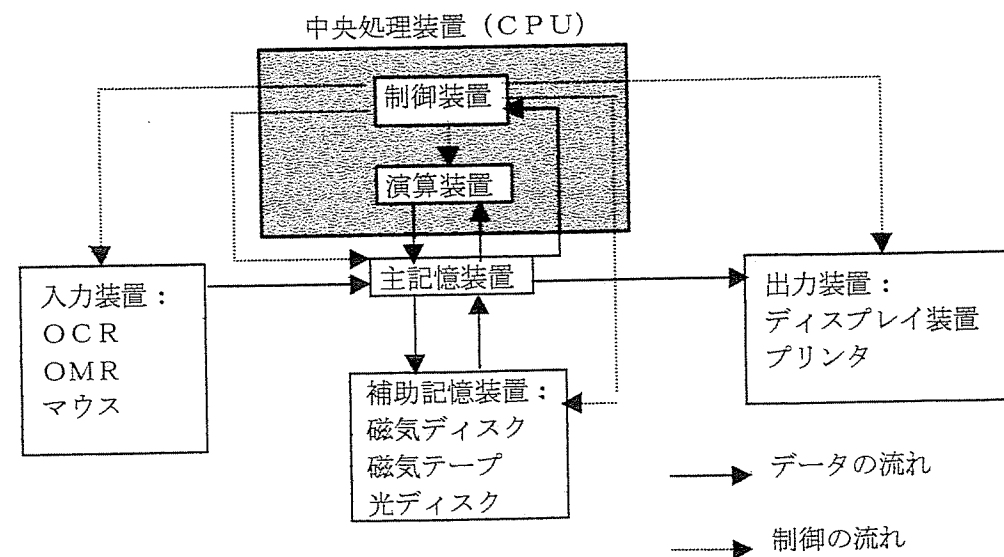


図2 コンピュータの基本構成

(次回継続)

(历史小知识)

朝鲜族 移住中 国的理 由及动 机

并影



中国的朝鲜族自何时起移住于中国，在学术界各有说法。不过，从其移住规模来看，自 1895 年甲午中日战争之后，大有增加趋势。特别是 1910 年所谓日韩合并之日起，到 1920 年止，每年以近万名的增加比率移入满洲，其规模之大，在人类的移民历史上可称之为首冠。

对朝鲜人的移住理由及动机，在李熙求《满洲和朝鲜人》（崇实专门学校，1932 年）一文中，通过调查，按其比例，提出了如下统计数字。

(1). 因为家里没有钱，而移住中国者，其绝对数为 33，相对数 16.4%。

(2). 在本国（朝鲜）由于经济上的贫困，为谋生而移住中国者，其绝对数为 30，相对

数为 14.9%。

(3). 因生活困难，移住中国者，绝对数为 72，相对数为 35.8%。

(4). 在本国，由于事业失败，而移住者，其绝对数为 24，相对数为 12.0%。

(5). 由于衣食困难，而移住者，其绝对数为 2，相数为 1.0%。

(6). 在中国通过旅行，感觉适于居住而移住者，其绝对数为 2，相对数为 1.0%。

(7). 由于朝鲜的政治环境，迫使离开本国而移住者，绝对数为 7，相对数为 3.4%。

(8). 想在满洲从事农业，而移住者，绝对数为 18，相对数为 9.0%。

(9). 以赚钱为目的，而移住者，绝对数为 11，相对数为 5.5%。

(10). 想在满洲干一番事业而移住者，绝对数为 1，相对数为 0.5%。

(11). 由亲属所带而移住者，绝对数为 1，相对数为 0.5%。

如上所示，移住中国的主要动机是由于经济上的贫困。这是符合当时的情况。因为，移住者的绝大多数是丧失土地的极其贫困的农民，加之当时满洲的土地价格低于朝鲜国内，因此吸引了贫困的朝鲜农民，为谋生而背景离乡移住中国。

● 图片：朝鲜族在长春车站移动中的情景

本の主人公になりませんか

中国朝鮮族の作家であり、我々の尊敬すべき先輩である金文学氏が、現在『日本の中の中国朝鮮族群像－在日中国朝鮮族の自白』という本の出版を計画しております。

すでに中国留学生の留日体験をまとめた本が国内で出版され、ベストセーラになったことがあります。

我々日本にいる中国朝鮮族もこの機会に各自の貴重な体験を世間に披露してみたらどうでしょうか。

本を出すと言えば、必ず日本で博士学位を取ったとか、事業に成功したとかという人たちだけの特権的領域であると思われがちですが、実はそればかりが中国朝鮮族の日本体験ではありません。

日本に来て、日本語学校でさまざまな壁にぶつかり、それを乗り越えようと一所懸命に頑張る姿、日本の大学院で生活難に喘ぎながらも学問の真理を求める道のり、空の上の雲でも掴もうと夢を膨らまして事業を起こした経営者の悪戦、会社に就職して一見安定したように見えても自分を見失わないための静かなる苦闘、やむをえない事情により不法滞在して光の见えない地下世界で積んでいる人間修業、日本人と結婚して一日24時間も経験している異文化体験－これらのすべてがりっぱな人生譚であります。あなたにはごく平凡に見える事も、中国でこれから日本を目指す人々には本当に貴重な経験であり、日本進出の指針にもなると考えられます。

我々の先輩－金文学氏はすでに中国・韓国・日本で活躍されている作家であります。彼は、今回『日本の中の中国朝鮮族群像－在日中国朝鮮族の自白』を中・韓・日三国で出版することを計画しております。うまく行けば、貴兄・貴女は中・韓・日三国で主人公になる可能性があります。ぜひ、この機会に我々が本の主人公になりましょう！ 自分を中・韓・日三国で思い存分アピールしましょう！ そして各自のさらなる発展を図っていきましょう！ 我々だってバカではありません。やろうと思えば何事でもできるのです。

『天池人文』編集部は、皆様が金文学氏の呼びかけに応じて本の主人公になることを強力にお勧めします。

さあ、迷わず筆を執りましょう！

《天池人文》編集部敬白

[일본속의 중국 조선족 군상-재일 중국 조선족의 자백]

원고 청탁서

현재 일본속에는 6천여명의 중국 조선족이 살고 있습니다. 우리 조선족 역사상 전례 없는 일본 진출의 “대군”을 형성하고 있습니다. 유학, 취학과 취직, 결혼의 길에서 이문화의 체험을 쌓으면서 분발하고 계실 뿐만아니라 학계, 비즈니스, 매스컴, 연예계 등 제 분야에서 활약하고 있는 분들이 많이 계십니다.

일본에서의 조선족의 분투의 발자취를 기록하고, 재일 중국 조선족의 활약상을 중국 동포들에게 알리며, 중국과 일본 양국의 친선 교류와 이해에 기여하자는 취지로 이번 흑룡조선민족출판사와의 계약으로 우리는 “일본속의 중국 조선족 군상-재일 중국 조선족의 자백”을 편집, 출판하기로 했습니다.

이에 특히 원고 청탁을 드리오니, 부디 공사간 다망하신 가운데 좋은 글들을 보내 주시길 부탁드립니다.

중국 조선족 역사상의 한 페이지를 장식하는 이 쾌거에 당신의 발자취를 남기시지 않겠습니까? 여러분의 뜨거운 성원과 지지를 부탁드립니다. 상세한 집필 요항은 하기와 같습니다.

집필 요항

*집필 취지: 국내 조선족 독자들에게 일본에서의 생활상을 알리고 일본에서의 이문화체험과 삶의 이야기를 기록하고자 합니다.

*집필 요구: (1) 제1인칭, 진짜 인물과 사실, 진지한 감정과 개성특색
(2) 6000자안팎
(3) 저자약력(600자안) 및 사진 1매
(4) 집필 언어: 조선어 (부득이한 경우 중국어도 가능)

*마감 기일: 1999년 4월 30일

*원고 보낼 곳: 〒730-0011 広島市中区基町 18-1-2062

海外KOREAN研究会 代表 金 文学

TEL兼FAX: (082) 223-2698



새책소개

런길을 떠나면, 옛날사람들은 지팡이를 지니고 갔습니다. 현대인들은 꼭 지도를 들고 갑니다.

지도라면, 어제까지는 자연위치를 종이장에 축소한것만을 가르쳤습니다. 그러나 오늘에는 문화지도가 새로 생겼습니다.

당신이 알고저 하는 나라, 지도책하나로 다 알가요. 그 나라의 역사,풍토,인간에 대하여 알기쉽고 요령중계 해설한 책 그것이 바로 현대의 문화지도입니다.

증극조선족작가 김문학,김명학 두형제가 서울에서 출판한 일본문화의 수수께끼가 어느 한국인도 여지껏 쓰지못한 일본문화지도라고 장안의 화제를 쏙 끌어모으고 있습니다. 북경의 책시장에 내놓으면 禁書處分을 받아 오히려 전중국에서 대히트할듯합니다.

일본에 와있는 당신에겐 평소의 궁금증을 속 시원히 풀어주고, 이제 일본에 오려는 사람에겐 훌륭한 길잡이가 될것입니다. 일본사람들엔 외국인들이 일본을 어떻게 보는가 하는 의미에서 참고가 될것입니다.

이책에 관한 문의는 직접 김문학씨 또는 천지인문편집부 앞으로 해주십시오.

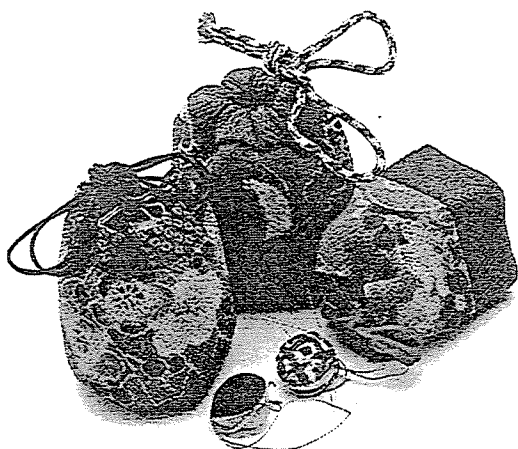
문학박사·이화여자 대학교수

이어령 推薦

누구도 쓰지 못한

일본문화의 수수께끼

전원혜·전밍혜 편저



우치
Woodson



왜 일본의 청녀는 숨이불, 서민은 종이 이불일까?
왜 일본에는 속옷 도둑이 많을까?
왜 일본 여자는 서서 소변을 보았을까?
왜 일본 남자는 바지를 입을 때 왼쪽 다리부터 넣을까?
왜 일본 여자는 립스틱을 아랫입술부터 바를까?
왜 일본어에는 성기의 명칭이 500개나 될까?
왜 일본 여자는 외국 남자에 약한까?
왜 일본인의 분수는 냄새가 덜할까?
왜 일본인은 2000년 후에 멸망하게 될까?



값 8,500원



ISBN 89-361-0326-1

天池俱乐部第47次定例会召开

以讨论天池俱乐部及「天池人文」的发展为议题,在东京都文京区政府大楼三楼会议室内举行了天池俱乐部第47次定例会。

新年刚过,面临着学期末或年度结算期,整个日本社会比较繁忙。尽管如此,十数位会员抽出时间参加了例会。其中包括从茨城县来的一位。

为了使天池俱乐部及「天池人文」,更有效地为在日中国朝鲜族服务,成为名副其实的在日中国朝鲜族团体,我们应该「作那些」、「怎么作」,就此,大家展开了讨论。特别是,目前迫在眉睫的「天池人文」的发行经费问题,大家结合自己及周围的现实,提出了各种有意义的想法。其中有的建议提高会费,有的建议应为「天池人文」定价并收购读费,以及要求理事会应为大家及时交纳会费提供便利的办法等。

大家共同的想法是天池俱乐部及「天池人文」的发展,光靠理事会是是不够的,因为理事会成员也有自己的工作,都在抽出宝贵的业余休息时间作工作,时间及精力有限,天池俱乐部的每个会员及在日中国朝鲜族应作出自己力所能及的事。

此外,就在新的一年要举行的具体活动,进行了讨论。包括野外活动,各种亲睦活动。

天池俱乐部第48次定例会通知

当今的社会是一个高科技的社会。高科技以不再是专门人员的「专利」。它以各种不同形式不断地撞击着我们的生活。其中最具有代表性的就是「计算机(Computer)」了。

「互联网(Internet)」、「电子邮件(E-mail)」、「奔腾(Pentium)」、「视窗 98(Windows 98)」、「微软公司(Microsoft Corp.)」等等,这些不胜枚举的与计算机有关的单词,会时时刻刻撞进你的眼睛,不管你愿不愿意接收它。它给我们的生活带来了极大的方便,甚至可以说是革命。如果不能有效地利用它,将会永远落后在时代。

据说被称做「现代职业人(Business Man)」所必须具备的三个基本条件中一个为会使用「计算机」。现在日本从业的中国朝鲜族中,不乏很多计算机行业的人员。为了能给会员各位提供实质的帮助,天池俱乐部与天池科技俱乐部(发起人:金炳哲)拟共同为大家举办「计算机技术系列讲座」,为大家讲授计算机基础知识,应用知识,最新动向及展望,也为大家提供各种咨询。

本次定例会为大家安排一次「计算机知识基础讲座」(讲师:宋虎岩),希望大家届时踊跃参加并提供宝贵的意见。根据大家的反应,我们将决定是否继续下去。也希望各位对计算机精通的人士毛遂自荐,为大家服务。

計算機基礎知識講座

時間: 1999年2月28日(日曜日) 午後 1:00~4:50

場所: 東京都文京区役所ビル三階B会議室

地下鉄丸の内線「後楽園」駅 出口前

JR総武線「水道橋」駅西口から5分(東京ドーム西側)

最新留学工作资料选编

(教育部国际合作与交流司提供)

32万走出去 10万人回国来

本报讯 1978年我国实行改革开放政策,在邓小平同志的大力倡导下,我国实施了扩大向外派遣留学人员的战略决策,向国外学习先进的科学技术、适用的管理经验和有益的文化,为国家经济建设服务。出国留学工作伴随着我国改革开放的深入而不断发展,截至1998年底,我国有近32万人到103个国家和地区留学或从事研究工作,其中国家公派留学人员近5万人,单位公派留学人员近10万人,自费留学人员16万多人,留学攻读的专业几乎涵盖了全部学科门类。20年来已有10多万留学人员学成回国服务,在我国的各个领域发挥着积极作用。

回国人员每年递增13%

本报讯 近几年来留学人员回国工作的人数越来越多,每年以13%以上的速度递增,1995年共有5000多名,1996年共有6000多名,1997年共有7000多名留学人员回国工作。英、法、日等一些发达国家回国的留学人员超过了当年去这些国家留学的公派留学人员。

从近几年回国工作的留学人员的情况看,长期在国外工作或获得永久居留许可的留学人员人数的比例在增长。据不完全统计,近几年回国工作的留学人员中每年约有1000多人是在国外获得博士学位后在科研、教学、政府、银行、大公司等单位平均长达7年以上,约有400多名在外已获得永久居留权的,并有多名已加入外国国籍的留学人员。

据统计,1978年至1997年我国共派出国家公派留学人员4.7万人,至1997年底已回国的国家公派留学人员3.9万人,占派出总数的82.98%。1996年实行国家公派留学人员派出方法改革后,派出的留学人员按期回归率达92.4%,履约率达100%。

「세계한민족포럼」창립

상임공동대표 李光奎씨



재외동포 교류협력을 추진하기 위한 민간 연구단체인 「세계 한민족 포럼」이 21일 오전 11시 세종문화회관 세종홀에서 창립총회를 갖는다.

이날 행사에서는 이광규(李光奎·사진) 전 서울대 교수가 상임공동대표로, 유재건(柳在乾) 국민의회의 부총재와 김희동(金熙東) 세민재단 대표가 공동대표로 취임할 예정이다.

서영훈(徐英勳) 신사회 공동선운동연합 고문, 김수규(金守圭) 서울YMCA 회장 등 1백여명이 참여하는 「세계 한민족 포럼」은 재외동포 인명록 발간, 재외동포신문 발행, 한글 소프트웨어 해외보급, 재외동포 기업인 비즈니스센터 운영 등의 사업을 벌일 계획이다.

<李鍾赫기자>
chlee@chosun.com>

中国市民的资金投向

购买债券和股票的家庭各占15%左右

本报讯 1998年底,国家统计局北京美兰德信息公司与中央电视台经济部,联合对全国12个城市进行居民收支情况调查。该调查涉及城市家庭2400户,抽样涉及的12个城市是:北京、上海、重庆、郑州、西安、昆明、成都、长沙、济南、福州、广州、长春。

调查表明,中国城镇居民的金融资产迅速积聚,储蓄动机向更高层次发展。

城镇居民储蓄存款余额由1978年的129亿元、1997年末的户均储蓄存款余额已超过2万元,再加上外币存款、各种债券和股票、手存现金,全部金融资产已超过2.5万元。

在改革开放的20年中,随着生活水平的提高以及就业、社会保障、住房、教育等多方面体制改革的推进,城镇居民的储蓄目的也发生了一系列深刻的变化,为子女上学作准备、养老、购买住房已演变成主要的储蓄动机,所占比例已分别上升到44%、38.4%、20.3%。准备外出旅游、购买汽车等更高层次的储蓄动机也已占到一定的比例,分别为5.1%和1.4%”(见下表)。

各种储蓄目的所占的比重(限选三项,%)

	比例		比例
准备日常花费	31.7	购买汽车	1.4
准备投资	5.0	准备外出旅游	5.1
用来防老	38.4	购买房子	20.3
为子女上学作准备	44.0	购买大件家电	6.5
防备意外	45.8	准备子女和本地结婚	10.9

储蓄投向多元化。随着金融资产的迅速积聚,人们开始越来越重视金融资产的保值、增值。在改革开放以前,存银行是人们进行储蓄的唯一出路。而今,可供居民选择的储蓄方式已越来越多,一些收益较高风险较大的金融投资方式正被越来越多的家庭所接受。从调查结果看,以购买债券、投资股市、购买保险、集邮、合伙投资作为储蓄方式的居民所占比例已分别达到16.6%、14.2%、11.7%、4.8%(见下表)。

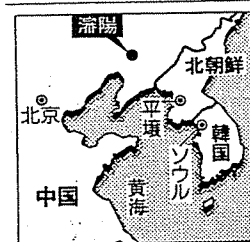
拥有某种金融资产家庭所占的比例(%)

	比例		比例
存入银行	84.0	集邮	4.82
购买债券	16.6	合伙投资	3.77
投资股市	14.2	购买古玩	0.67
买保险	11.7	其他	10.55

韓国の対中輸出主要品目

単位:千ドル

	97年総額	増加率	98年11月末まで	増加率
1 合成樹脂	1,471,866	17.4%	1,267,235	-5.3%
2 皮革	795,906	7.9%	564,670	-24.6%
3 油類	532,662	89.6%	424,938	-13.5%
4 冷延鋼板	289,358	7.2%	331,707	28.7%
5 繊維・織物	391,768	22.0%	317,177	-11.9%
6 合成繊維	505,718	13.8%	310,465	-34.3%
7 軽油	781,583	154.7%	302,836	-58.3%
8 その他織物	329,404	3.1%	288,767	-3.3%
9 印刷用紙	263,167	40.3%	251,399	0.3%
10 ポリエステル	279,051	3.5%	209,091	-18.9%
合計	13,572,463	19.3%	10,805,252	-11.8%



中国東北部・瀋陽
領事事務所
韓国が開設
【上海30日】古谷浩二
北京の韓国大使館などによ
ると、中国と韓国は十八

日、中国遼寧省瀋陽市に韓国の領事事務所を開設する合意覚書を交わした。今春にも開設される見通しだ。韓国は一九九二年の国交樹立当初から、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)情報の収集や韓国人保護などのため、中国東北部に領事館を開設することを要望していたが、中国側は北朝鮮との伝統的な友好関係に配慮し、慎重な態度をとっていた。事務所の名称は駐中国韓国大使館領事部瀋陽事務所。正式の領事館でないのは、中国が北朝鮮に配慮したためとみられる。

交流、協力、共同発展

WE BECOME WHAT WE THINK ABOUT



我々が考え

我々が実行し

我々が支援し

我々の夢を実現する

発行名：天池人文 Vol.3 No.2 総第22期

発行日：1999年2月21日

編集部：天池倶楽部「天池人文」編集委員会

編集長：李東哲（吉林）

発行者：朴 鶴

発行所：日・中・韓語学研究所

〒105-0003 東京都港区西新橋2-13-16 多田ビル4F-A

TEL/FAX: 03-3592-9005 HP: 040-208-6445